# 零崎陽織の人間家族

十色@停滞気味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零崎陽織の人間家族

【Ｎコード】
Ｎ７５２１Ｐ

【作者名】
十色@停滞気味

【あらすじ】
「零崎一賊」　――それは”殺し名”の第三位に列せられる殺人鬼の一賊。　女子高生、空　未遥（キノシタミハル）。彼女は突然、同級生の男子に呼び出され、体育館裏へと向かう。　しかし、そこで起こる非日常のこととは――・・・！？　彼女を「妹」と呼ぶ変態の”殺人鬼”の出現。そして、彼女を「兄弟」と呼ぶ”殺し屋”の登場――。

## 第一話「過去過重の回想」（前書き）

この物語は死の描写、残酷な表現、血の表現を含みますので、苦手な方はブラウザバックをおすすめ致しますｍ（＿＿）ｍ

こちらは西尾維新さんの著作、「人間シリーズ」の二次創作として書いたものです。
西尾維新さんの世界観、言葉の綾が苦手な方は、ブラウザバックをよろしくお願いいたしますｍ（＿＿）ｍ

## 第一話「過去過重の回想」

――私はこんな世界に生きていてもいいんだろうか。

そんなことを時々、思っていた。

幸せな家庭なはずなのに、何も変な事はないはずなのに、悩んでもいないし、平凡なはずなのにそう思ってしまった。

だから私はきっと生まれてくる前から、《間違い》をしてしまっていたに違いない。

生まれてきた場所と
生まれてきた意味と
生まれてきた身体と
生まれてきた精神と
生まれてきた世界は
全てがごちゃごちゃで、
全てがすれ違っていたに違いない。

そして最大の間違いは、
『人』と『鬼』の心を両方持って生まれてきてしまったこと。

私は結局、どちらにもなれなかった。

第一曲「過去過重の回想」

## 1（前書き）

＞i161147―2214＜

◇登場人物◇

空　未遥（キノシタ　ミハル）――女子高生。

# 1

「・・・・・・あ、あれ？」

放課後の体育館裏。
そこに一人の少女が佇んでいた。
誰も立ち入ることもなく全く使われていないので掃除も行き渡っておらず、その辺りの草は膝辺りまで伸びきっている。

まだ放課後ということで、グラウンドからは絶え間なく部活をしている生徒達の活気のある声が、壁を伝って反響していた。

真逆に、静けさを保つこの体育館裏は・・・まるでここだけ切り取られたかのような空間に思えた。

無機質な白い壁が夕日を遮って、ただ肌寒い風だけが吹き抜けていく。
草がさわさわと擦れあう音を立てて、また静かになった。

「・・・えぇっと・・・」

あぁ。

ようやく今置かれている状況を理解できました。

すみません。
お母さん、お父さん。
それと、お兄ちゃん。

私、空（きのした）未遥（みはる）。

十七才にて――
「人生最大の、ピンチみたいです。」

そう呟いて、少女はため息をついた。
そして目の前の現実をまっすぐにみる。

その少女の前には――真っ赤に染まった血だまりができていた。
その中には数分前まで、自分の同級生だった”モノ”がある。

「・・・・・・マジか。」

どうやら。

・・・どうやら私は、人を殺してしまったようです。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「・・・どうして、こうなったんだっけ？」

ただ呆然と立ち尽くす少女は呟いた。

少女はつい今さっきまでの記憶が、欠落していた。
記憶は確かにあったはずなのに、煙のようにパッと消えてしまったかのような。
まるで、どこかに置き忘れてきたかのように記憶がすっぽりとなくなっていた。

だけど現実は無惨に目の前にあり――この少女を呼び出した同級生、鈴城陸矢（すずきりくや）は血だまりの中で死んでいる。

否、殺されていた。

こんなこと目の前で起きていて、記憶しない方が不思議である。

「うわぁ・・・」

気付くと自分の服にはべったりと血が付着していた。
部活にいく途中だったので、着ていたのは制服じゃなく体操服だったのだか・・・見事に真っ白な生地が真っ赤に染まっていた。

体のどこも痛くはないので、どうやらこれは彼の血らしい。
ぬるぬるしていて、すごく気持ちが悪い。

少し時間がたったせいか、血が固まりはじめていて鉄の臭いがツンと鼻を刺激した。

・・・一体なんで、私がこんな目にあわなくちゃいけないのだろう。
こんな悲惨な光景を目の前にして、私は何故か冷静だった。
いや、逆に混乱している。

「あぁ、もう・・・なんで、」

言葉が途切れ途切れになる。
訳がわからず混乱している頭を必死に落ち着かせる。
落ち着け。落ち着くんだ未遥。

記憶がないなんて、まるでいきなり夢の中に連れてこられたみたいだ。
この場合、きっと悪夢だ。
いっそ、自分が殺した記憶があるほうがまだマシだと思う。

自問自答なんて、なんの意味もない。

なんで同級生は死んでいるのか？
――それは、殺されたから。
なんで同級生は殺されたのか？
――そんなのは知らない。

殺したのは、誰か？
それは。
それは、勿論――。

はぁ、と。

再びため息をつく。

こんなの、私しか犯人がいないじゃないか。

犯人は私で即現行犯逮捕。

探偵なんて必要ない。

この返り血を見れば誰が見ても私が犯人としか言えないだろう。

記憶がないんだ。

なんて、言い訳にしか聞こえないのに。

「どうしよう・・・」

呟いてみたけど、どうすることもできない。

まだ見られてはいないことだしアリバイ工作とか、ドラマの見よう見真似でやってみようかな・・・？

と、そこまで考えたとき――。

「こんにちは、可愛いお嬢さん」

後ろからいきなり声がした。

## 2

「――っ！」

音もなくいきなり声がしたので、思わず息が止まった。

素早く後ろを振り向くと、そこには針金のように細い背高い男の人が立っていた。

見たことのない顔で、正直新しい先生なのかと思った。

それにしても、

こんなに草がおいしげっているのに、”草が擦れる音もしなかった”なんて・・・この人どうやって入ってきたんだろう。

人に見られたというのに、ひどく心は落ち着いていて・・・。

初めて会った人なのに何故かすごく懐かしくて、『安心感』を抱いてしまった。

なんというか・・・友達とか知り合いとかじゃなくて。

そう、まるで――

『家族』と偶然会っちゃったみたいな。

――って、そんなこと考えてる場合じゃない。
人に、見られてしまった。
・・・とりあえず、これでもう”悪あがき”は出来ないわけだよね。

「気配から人識君だと思ったんだが・・・どうやら”また”人違いをしたみたいだね」
針金男は頭を傾けて呟く。

どうやら、私を誰かと勘違いしてしまったらしい。
ここは学校の中だし、この学校の生徒の誰かとなのかな？

「・・・えっと、誰か探していらっしゃるんですか？」

私は針金男へと声をかけた。
「え？」
話しかけられると思ってなかったらしく、針金男は私に驚いた顔で見合わせる。

「――あぁ、いや。もういいんだよ。なんというか人探しというか、道を間違っちゃったようなもんだからね」
うふふ、と針金男は笑う。

・・・どうやら、この人は通報するつもりはないらしい。

普通、返り血のついた私を見た瞬間に逃げてるだろうし・・・しかもそれどころか、そんな私を無視して死体へと近づき、しゃがみこんだ。
「ふぅん。喉を頸動脈にそってぴったり切ってあるか。しかも、”血脈にそって”とはね。プロのプレイヤーでもこんな芸当みたいな殺し方できるやつはそうそういないだろうね」

「お嬢さん、名前は？」

くるりと振り向いて満面の笑みで私にそう尋ねた。
名前を尋ねられるとは思わず拍子抜けしてしまった。

「え、えっと・・・空（キノシタ）未遥（ミハル）っていいます・・・」
「未遥ちゃんか、ふむ。」

「これは、未遥ちゃんがやったのかい？」

”これ”とは、無論死体のことだ。

「・・・・・・」

さて・・・どう言おう。
記憶がない、なんて言っても信じてくれるはずもない。
だけど、やったともやってないとも言えないし・・・。
いや、でも・・・

「記憶が、ないんです」

私は正直に、
”悪あがき”をしてみることにした。

「記憶がない？」
針金男は不思議そうな顔をした。

「はい。」
私は頷いた。
――何故かこの人には、話しても大丈夫だという『確信』があった。
『騙そう』という確信ではなく、安心できるからこその本音。

その安心と確信が、どこから来たのかは全くわからない。

「・・・ふむ。それは、興味深いね」
本当に不思議そうな顔をする双識さん。
それから少し黙り、立ち上がって少し離れた後ろのフェンスに寄りかかる。

「未遥ちゃんは刑事ドラマでよくカッとなって殺したとかよくあるけど、あれって実際あると思うかい？」

「魔が刺すってやつですか？」
「そんな感じだろうね。」

魔が刺す。
それを聞いて私は、

「カッとなったりして、あまりに怒って殺すことはあるんじゃないですかね？人は結構、恨んだりする人多いもんですよ。あと、」
物騒な世の中ですし。
そう呟いた。

そう付け加えたのは、
今噂になっている『連続殺人犯』を思い出したからである。
被害者は、六人。六人は多そうに見えて、災害でなくなる人の数と比べると少ないと思えてしまう。
だけど、災害よりも恐ろしいと思えてしまうのは不思議だ。

「人が殺すことに、人は怯える。それは何故だと思う？」
まるで私の心を察したかのように、針金男は問う。
私が黙ってしまったことを見越して話を続けた。

「人の天敵は人自身だからだよ」
針金男ははっきりといった。
人の天敵は人。
人が死ぬ原因一位は、自殺だと聞いたことがある。それも、人が人を殺すことになるのだろうか？

「ただあと一ついうならば、人は動機もなく理由もなく、殺すこともできてしまうことさ。無尽蔵にね。
だけど、そうなったら・・・きっとそれはもう、人間じゃないだろう。例えるなら、”鬼”だ」

そういってまたうふふと笑う針金男。

「・・・・・・。」

変わっている人だなぁと思う。

いや・・・そもそも殺人現場を目撃して逃げないどころか、どうどうと犯人かもしれない私とこうやって話している時点で変わっているのだが。

「――おっと・・・話しすぎてしまったようだ」
針金男はフェンスから腰を離す。私とまっすぐに対峙した。

「ちなみに僕はこの学校とは無関係の人だ。たまたま通りすがっただけの格好いいお兄さんと思ってくれて構わない。だから、安心してくれていい。誰にも口外なんてしないから。」

にっこりと満面の笑みを浮かべて言う針金男。
瞳はキラキラと輝いて見え、尊敬してしまうような頼りがいのある目。
不覚にも少しだけ、格好よく見えてしまった。

後に、格好いいと思った事をひどく後悔してしまう事を
――私はまだ知らない。

## 3（前書き）

書き忘れていたのですが、この小説内での時間・人物設定では原作とは異なり、零崎双識は生きており舞織とはすでに遭遇し終わっている世界観になります。いろいろと考えた結果ですが、ご了承いただけると幸いです＞（＿＿）＜

## 3

「因みに、未遥ちゃんは最近起こっている『連続殺人』のことは知っているかな？」

針金男は何の突拍子もなしにそんなことを聞いてきた。

「え？それくらい、地元ですし、知ってますけど。・・・・・・！？」

そう答えた瞬間、私は驚いて声が出なかった。

針金男はいきなりコートの中からすっと鋏（はさみ）をとりだしたのである。

しかも、ただの鋏ではない。

鋏は鋏でも、鋏として使えないんじゃないかと言えるくらいの馬鹿でかい鋏。

さて、私は鋏と何回言ったでしょうか？

なんて。

冗談を空気も読まずに思いながら、

私は何故か”焦る”。

その鋏の刃は剣のように、峰なんてものは存在しなかった。
まるで、ナイフを二本くっつけたような感じ。
刃が鈍く光を反射して、思わず目が眩む。
こうして見ると、鋏は人を殺す凶器に見えないこともない。
凶器。
私の頭の中でふと横切ったのは、まだ捕まっていない『連続殺人犯』の事だった。
この連続殺人犯から殺された死体は全て『綺麗に解体』されていたという。
この鋏だったら。
『童話に出てくるオオカミのお腹を切るように』
綺麗に解体できそうだなぁと、
ふと思ってしまったのである。
私、この針金男が連続殺人犯だとか思っている？
「・・・・・・まさか。」
私は思わず口にだして、自分の思ったことを否定した。
だが、この針金男は――

人を『殺すようにしか』見えないのだ。

私はぶんぶんと首を振って、その感情さえも否定するように意を決して、

「その鋏どうするんですか？もしかして、裁縫でも始めるんですか？」

なんて和ませる気持ちで、針金男に尋ねようとした。

だが、その瞬間――

針金男は目にも止まらぬ速さで私にその鋏を投擲した。

矢の如くの勢いで真っ直ぐに投擲されたハサミ。

「っ――」

ザワッと背筋が固まった。

殺意の塊が、こっちに向かってくる。

私はいきなりの事で全く意味がわからず、私は目の前を手で覆った。

ザクッ
と音がして。

投擲された鋏は、
私に刺さらなかった。

うっすらと、つぶっていた目を開ける。

鋏は数センチ横を通り過ぎて――
針金男は私の後ろの、
『死体』に投擲していた。

しかし、死体にも刺さらなかった。
いや。
地面には刺さった。

けしてそれは、針金男が死体からわざと外したのではなく――

死体が動いたからである。

否、生きていた。

「！！？」

「そう。なんと彼は生きていたんだよ、未遥ちゃん。」

私の驚くのを見て取って、針金男はその事実を口にした。

そう。

鈴城陸矢は、生きていた。

・・・死んでいたと思っていた。

遠目で見ても、肌の褐色はなくなっていて。

とても生きているとは思わえかったからである。

生き返った（正確には死んでいなかった）彼は血溜まりから2、3メートル先の場所に針金男と対峙するように立っていた。

沈黙が、続く。

「その動きと殺気・・・殺し名だろう？もしかして、”匂宮”かい？」

最初に静寂を破ったのは、針金男だった。

殺し名？

匂宮？

私は知らない単語がでて首を傾げる。

確か匂宮は何かの本で、そんな名前が使われていたような。そんなことを思い始めた未遥をよそに、先ほどまで死体だった彼。

鈴城陸矢は温和そうにニッコリと笑った。

「初めまして、自殺志願（マインドレンデル）さん。やはり、あなたは流石だ。この僕を『仮死状態』を見破るなんてね」

彼は今時の高校生とは思えないくらい丁寧な口調で針金男に答えた。

「流石といわれるほどじゃあないよ。君に近づいた時はまだ気づいちゃいなかったよ。しかも、殺し名ともね」

マインドレンデルと呼ばれた針金男は彼に気にすることもなく、ゆっくりと地面に突き刺さっていた鋏を手に取る。

「それにしても、全くだよ。まさか殺し名にこんな芸当ができるやつがいるなんてね。まるで”オポッサム”みたいじゃないか。尊敬に値するよ。」

そんなことをいいながらゆっくりと地面から鋏を引きぬいた。

「お褒めに預かり、光栄ですよ」

彼は温和そうな顔を崩さないままそういった。

オポッサムは死にまねが上手い動物だけど、それが誉め言葉かどうかは別として実際すごいことのようだ。

確かに自分で心臓を止めるなんてこと、普通できるはずがない。

「因みに君は匂宮なのかい？以前、戦ったことがあるから気配が似ているんだよ。」

「あぁ、忘れてました。名乗るのがまだでしたね。僕の名前は蓬生（よもぎ）彼岸（うひがん）と申します。以後、お見知りおきを」

そういって、鈴城陸矢こと蓬生彼岸は礼儀良くお辞儀をした。

「ふぅん。また分家の方か。どうやら私は匂宮の分家とは縁があるらしいね」

針金男はシャキンと鋏を鳴らした。

「で？ここで殺し合うつもりかい？殺し名の君がここにいるって事は、誰かを殺しに来たんだろう？君のその傷は本物のようだけど、逆にやられたのかな？」

彼の首筋からは血が絶え間なく流れていた。

傷口が開いたのか、倒れていた時よりも増してドクドクと鮮血が制服を汚していた。

「・・・・・・ちっ」

ギリッと歯と歯がすれる音が聞こえた。

それは対峙する彼から発せられたものだった。
思わず彼の表情を伺ったが、温和そうな表情は変わっていなかった。

「勿論、そこの彼女からやられたんですよ」

そう言って私を横目で見た。

「いやぁ、自殺志願さんが来るのは予想外でしてね。そこの彼女に用があったのですよ。油断しすぎたのか不意打ちを食らってしまって・・・この様ですよ。本当に、情けない。」

血まみれの彼は手を広げて首をふる。
「この程度の傷なら、意外と簡単に『仕事』も出来たはずなんですが・・・自殺志願さんがいるとなると、かなり難しいですね」

ふむ。
と血だらけの彼は考えるように腕を組んだ。
針金男は私の横にいつの間にか移動して、鋏をクルクルと回していた。

「じゃあ、自殺志願さん」
口を開いた彼は信じられないことを呟いた。

「3ヶ月間。『この娘を預かって頂けませんかね』？」

彼はニッコリと微笑み、自殺志願と呼ばれる針金男の表情をうかがうように見た。

針金男はそれを聞くが否や、わけがわからないとでもいうように首をかしげた。

「何をいっているんだい？預かる？未遥ちゃんの肉親でもないのに、よくそんな口を叩けるもんだね」

そうだ。
何を言っているのだろう、彼は。
預かるって・・・私には帰る家も家族もいるというのに。

「いえ。そうですねぇ・・・肉親とまではいきませんが、実際『家族』ではあるんですよ」

「は？」
そんな声を発したのは私だった。
全く意味がわからない。

私と彼が、家族？
そんなわけがない。
蓬生彼岸なんて名乗る彼を私は知らないし、私にはちゃんとした血の繋がった家族がいるのだから。

「何・・・？」
だが、針金男はその答えに怪訝そうに顔をしかめた。
「一体、どういうことだ」
「そのままの意味ですよ？自殺志願さんなら、察しはついているんじゃないですか？」
クスクスと彼岸は笑う。彼は温和顔を引きつらせた後、ニヤリと不気味に笑った。私はその豹変の仕方に思わず背筋が凍る。
「――あぁ。因みにその娘を今更『助けよう』だなんて思わないでくださいね？その子は生まれた時から、”普通”ではないのですから。元々、”戻る”ということがないんですよ。」
戻ることがない。
それがどういう意味を示すのか、私には全くわからなかった。
一体、何が”普通”じゃないのか。
そして、何に”戻る”のか。
彼は話を続ける。
「まぁ貴方がこの子を”目覚め”させてくれるなら、それはこちらも都合がいいですから。その娘はおまかせすることにします。どうやら――

貴方が彼女を『守っていらっしゃる』ご様子だと、この子は一賊の”血”も入っているようですしね。なので、安心して預けられますね。クスクス。だって零崎一賊は――
『家賊』のためなら、放ってはおけないんでしょう？」

と、彼は笑った。
針金男はクルクルと鋏を右手で回し続けながら、沈黙を保ち続けている。
あぁ。と、彼は念を入れるように続けた。

「ただし、3ヶ月後には必ず連れてきて下さいね？今回は零崎一賊ではなく、その娘が”主役”なのですから。」
まぁ、連れてこられなくても”迎え”に参りますが。
ぼそりとそう付け加えるように不気味に呟いた。

そして今度は私を見た。

その表情はあの温和そうな表情ではなく、
狂気に満ちた笑顔だった。

「あなたがどこまで成長するか、これから楽しみになりました。・・・これでは私も、高みの見物が”できそうにない”、ですね。」

「ですが、自殺志願さん。お忘れなく。その娘は私達にとっても大事な”兄弟”なのですよ。」
「――・・・」
針金男は何かを言おうとして、私をうかがい、やめた。

「では、ここらで失礼させて頂きます。それでは、ごきげんよう。」

ペコリとまた律儀に頭を下げて、次の瞬間には音もなく彼は消えていた。

まるで夢のようだった。
死体も男の子も、消えていた。

ただ現実であったことを物語るように、血溜まりと返り血だけが残った。
わたしはあの不気味な笑みを思い出して、また背筋が凍った。

夢だと思いたい。
ここであったことも、この返り血も。
だけど、それは現実でしかなくて。
どうしようもなく、現実でしかなくて――。
だけど、私は『こうなることを予測していたかのように』あまりにも落ち着いていた。

「あの・・・貴方は。自殺志願さんは、一体・・・何者なんですか？」
私はずっと尋ねたかったことを口にした。
針金男はコートに鋏をしまう途中だった。

「あぁ。名前をまだ教えてなかったね！やれやれ、自分から名前を尋ねておいて自分の名前を言わないなんて、失礼な話だった。改めて、自己紹介させてもらうよ」

「私の名は、零崎双識（ぜろさきそうしき）。ただのしがない、『殺人鬼』さ」

殺人鬼。
確かに、彼はそういった。

そして、これが私の零崎一賊との第一接点だった。
そしてこの日からこの私、空　未遥の人生が変わった。否、人生のレールは『通常の道』へとようやく切り替わり、走り出したのである。

前の道は――錆びれ行くだけだ。

そして、この後私は零崎双識のある一言で、彼を思いっきり殴る事になる。

それは彼の素であり、後ほど後悔する事になるであろう・・・序章だった。

「そうそう。こっちが本題といっちゃあ本題だか、未遥ちゃん。
僕の――妹にならないかい？」

「・・・・・・・・・はい？」

この人は変わっている人ではなかった。

つまり。
この双識という男は、
ただの『変態』だったのである。
第一節，Ｆｉｎｅ．

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7521p/

---

零崎陽織の人間家族

2011年10月8日13時54分発行